島根大学教育学部紀要（教育科学）第13号　23～31頁　昭和54年12月

主婦の被服製作に関する実態と意識

太　田　昌　子*　安　井　芳　子**

Masako OOTA and Yoshiko YASUI

Housewives' Actual Condition and Consciousness of Home Sewing

Abstracts : This investigation was made to reveal the housewives' actual condition and consciousness of the home sewing. The subjects were 572 housewives living in Izumo City.

As a result of our study, we recognized that both the increasing of the housewives who worked outside their homes and mass production of the ready-made clothes resulted in markedly less home sew ing. Therefore, we also recognized that the sewing eduation in school must be reviewed and then be modified.

緒　言

家庭科における被服製作学習の目標は，単にその技能を生活の中で役立たせるためということだけにとどまらない。むしろその習得した技術を通して，被服生活や家庭生活全般についていっそうの関心を持たせ，且つこれらの経営能力を高める契機ともすることが，より重要なねらいである。或いはまた，製作活動の中で創造性，計画性，合理性を養うなど，人格形成上必要なさまざまな資質の陶冶，能力の伸長ということも決して無視することのできないねらいである。

しかしながら，科学の進歩や社会経済の発展などによって家庭生活は大きく変貌しつつあり，このような状況の中で家庭生活で必要とされている被服技術とはいったい何であるか，或いはまた今後の被服生活の動向はどのようであるかを把握せずに，ただ従来の教育内容に固執し旧態然とした指導に甘んじていたのでは，家庭科教育の振興は到底望めないであろう。

以上のような観点に立ち，これからの家庭科における被服教育のあり方を考えるための基礎資料を得る目的で，今回の調査研究を行なった。

調　査　方　法

1．調査時期　昭和52年9月中旬～9月下旬

2．調査方法　質問紙法

3．調査対象

出雲市立第一中学校，同第二中学校の3年生男女生徒の母親である。その配布数，有効回収数，有効回収率は表1に示す通りである。

この二校を選定した理由は，これらの学校がその校区として農村，商業地域，住宅地域等をほぼ偏りなく包含しており，また母親の年齢も過去，現在の被服生活の経験，子どもの教育への関心等において適当と考えられたからである。

尚調査対象者家庭の地区別分類と人数，家族数，職業，年間収入，年間被服費，および調査対象者の年齢，学歴，家事労働時間等については表2～表9に示した。これらのほかの家庭状況をみると，子ども数は2人以下が約65%を占め，3人以上は約32%であった。また夫または妻の親と同居している家庭は約36%であり，同居していない家庭は約62%であった。

表1　調査対象校および配布数，有効回収数，有効回収率

調査対象校	配布数	有効回収数	有効回収率
出雲市立第一中学校	335	287	85.7%
出雲市立第二中学校	320	285	89.1%
計	655	572	87.3%

*　島根大学教育学部家政研究室
**　松江市大庭小学校

表2　調査対象者家庭の地区別分類と人数

中心部		農村部					
地区	人数	地区	人数	地区	人数	地区	人数
	人		人		人		人
今市	126	荒茅	26	松寄下	16	朝山	5
大津	117	古志	22	上島	14	高岡	4
塩冶	76	西園	20	船津	8	稲岡	2
天神	8	上塩冶	19	外園	8	渡橋	2
小山	4	高松	19	東園	8	大島	1
姫原	2	白枝	18	馬木	8		
中野	1	浜	18	下横	5		
計 334(60.0%)		計　223(40.0%)					

注：比率は無答者を除いた557人を100とした数値である。

表3　調査対象者家庭の家族数

人数・比率 / 家族数区分	人数	比率
	人	%
3人以下	51	8.9
4～5人	309	54.0
6人以上	199	34.8
無答	13	2.3
計	572	100.0

表4　調査対象者家庭の職業

夫妻区分 / 人数・比率 / 職業区分	夫		妻	
	人数	比率	人数	比率
	人	%	人	%
農・林・漁業	65	11.4	78	13.6
自営商工，サービス業	178	31.1	116	20.3
公務員，会社員，教員，パートタイマー	265	46.3	173	30.2
労務者	9	1.6	3	0.5
内職	0	0	33	5.8
家事専従	0	0	105	18.4
無職	16	2.8	25	4.4
無答	39	6.8	39	6.8
計	572	100.0	572	100.0

表5　調査対象者家庭の年間収入(実収入)

人数・比率	人数	比率
	人	%
149万円 以下	55	9.6
150～249万円	183	32.0
250～349万円	141	24.7
350万円 以上	127	22.2
無答	66	11.5
計	572	100.0

表6　調査対象者家庭の年間被服費

人数・比率 / 年間被服費区分	人数	比率
	人	%
9万円 以下	157	27.4
10 ～ 19万円	216	37.7
20 ～ 29万円	69	12.1
30 ～ 39万円	29	5.1
40万円 以上	28	4.9
無答	73	12.8
計	572	100.0

表7　調査対象者の年齢

人数・比率 / 年齢区分	人数	比率
	人	%
39才以下	129	22.6
40～43才	266	46.5
44才以上	154	26.9
無答	23	4.0
計	572	100.0

表8　調査対象者の学歴

学校 / 人数・比率	高等小学校	新制中学校	高等女学校	実科女学校	高等学校	専門学校	短期大学	大学	各種学校	その他	無答	計
人数	157	413	48	21	158(9)	17(4)	8(2)	13(2)	149(138)	3	3	572
比率 %	27.4	72.2	8.4	3.7	27.6(1.6)	3.0(0.7)	1.4(0.3)	2.3(0.3)	26.0(24.1)	0.5	0.5	100.0

注：1）回答は多答式である。
　　2）（　）内数値は被服または家政課程，学科，学部等の出身者数および比率である。

表9　調査対象者の家事労働時間（週当り）

時間 / 人数・比率 / 家事区分	3時間以下		4～12時間		13時間以上		無答		計	
	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
炊事および後片付け	134	23.4	165	28.8	206	36.1	67	11.7	572	100.0
掃除	185	32.3	269	47.1	32	5.6	86	15.0	572	100.0
買い物	197	34.4	261	45.7	28	4.9	86	15.0	572	100.0
家族の世話	195	34.1	191	33.4	44	7.7	142	24.8	572	100.0
洗たく・アイロンかけ	197	34.4	275	48.1	22	3.8	78	13.6	572	100.0
裁縫・つくろいもの	335	58.6	103	18.0	19	3.3	115	20.1	572	100.0
その他	32	5.6	40	7.0	27	4.7	473	82.7	572	100.0

4．調査内容

調査内容は表10に示す通り，家庭における主婦の被服製作状況や意識，製作技術の履習状況や技能の程度等である。尚これらのほかに被服製作の教育に関する意識調査も同時に行なったがその報告は今回は省いた。

表10　調　査　内　容

1．衣類の調製方法とその理由について
2．衣類数に対する考え方について
3．被服製作技能の履習状況について
4．現在の技能の程度について
5．過去1年間の自家製作数について

調査結果および考察

Ⅰ．被服製作に関する実態と意識の概観

まずこれらの調査項目に対する全対象者の回答を通してみた被服製作の実態と意識について述べてみたい。

1．衣類の調製方法とその理由について

ここでは「家族のふだん着やちょっとした外出着程度」のものについての調製方法とその理由を問うてみた。結果は図1a～cに示す通りである。

この図についてまずa，調製方法をみると，「ほとんどすべて買う」者が約7割弱を占めており，「ほとんど自分で作る」者は5％にも満たなかった。過去において家族の衣服調製作業は主婦の最も重要な仕事の一つであったことを思うと，これは極めて大きな変化といえる。

次に「ほとんど自分で作る」「自分で作ったり買ったりする」と答えた者を対象としてその理由を問うてみた。結果は図1bに示す通り，答えはかなり分散しているが，「作ることが好きだから」の約40％を初めとして，「家族に喜ばれるから」「個性的なものができるから」などの，自己の個性の発揮や家族との精神的つながりを持つものとして被服製作をとらえている回答がかなり多かった。しかしまた「作ることが経済的だから」と答えた者も4割近くあり，一方においては経済面を考慮した合理性があることを示していた。「既製品は仕立てが雑だから」「既製品で体にあったものがないから」という既製品に対する不満から自分で作るとした者はそれぞれ約15％程度にとどまり，比較的少なかった。

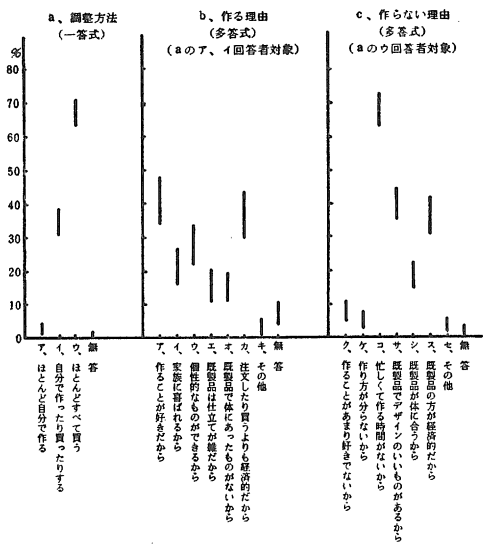

図1　衣類の調製方法とその理由

注：図中の数値は比率の信頼区間法[1]（信頼水準95％）で求めた。以下の図も同じ。

次に「ほとんどすべて買う」者を対象としてその理由を問うてみると，結果は図1cのようであった。すなわち「忙しくて作る時間がないから」と答えた者が約7割で圧倒的に多く，次いで「既製品でデザインのいいものがあるから」「既製品の方が経済的だから」と答えた者がそれぞれ4割前後でかなり多かった。「作り方がわからないから」「作ることがあまり好きでないから」はいずれも極めて少数であり，作らない理由はほとんどが忙しさとか既製品の進出とかの外的条件によるものであることを示していた。

このように忙しさをあげる者の多い背景には，さきの表4にもみられるように，対象者のうち有職者が約7割を占めるという事実がある。近年における主婦の職場進出は全国的にもめざましく，それを表わす指標として女子雇用者中に占める既婚者の比率をみると，昭和30年では35.3％であったのが，昭和51年には64.1％に及んでいる[2]。またこのような有職婦人の生活時間をみると，家事労働時間がかなり圧縮されていることが種々の調査でも明らかにされている[3]。また同じ家事労働でも，炊事，掃除，家族の世話など日常手を省けない家事に比べ，既製品でも手軽に間に合わせられる「裁縫，つくろいもの」の時間は，表9にもみられるように，約6割の者は週当り3時間以下という少なさであり，忙しさのしわ寄せがここに大きく集中していることがわかる。

一方既製品の進出状況をみると，既製服生産高は昭和45年から49年の5年間だけでも約1.3倍に及んでいる[4]。

今後ますます職業を持つ主婦の数がふえ，一方において品質のよい既製品が豊富に出回るようになれば，家庭での被服製作はいっそう減少することになろう。

またここには直接表われていないが，作らない理由の背景には，生活水準の向上と共に，衣類がほとんど更生されることなくいわゆる「使い捨て」られる状況にあることも見逃してはならないであろう。

2．衣類数に対する考え方について

家庭における被服製作状況と共にその根底にある考え

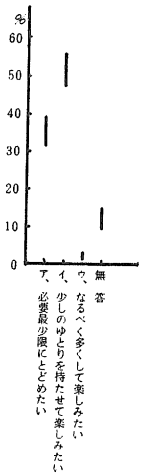

図2　衣類数に対する考え方
（一答式）

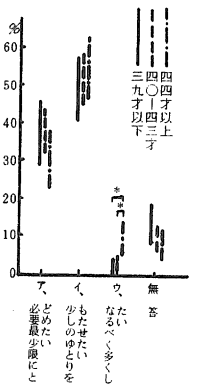

図5　衣類数に対する考え方
—年齢別比較—

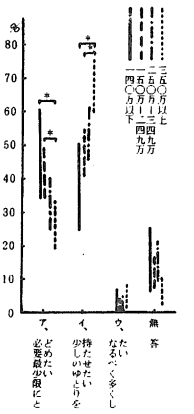

図10　衣類数に対する考え方
—収入別比較—

表11　被服製作に関する実態

洋・和裁別	品目 ＼ 項目	A. 過去の履習状況 ア、全くないこと	習った（あてはまるもの） イ、中等学校	ウ、高等学校	エ、専門学校	オ、裁縫学校	カ、家庭（母・姉など）	キ、個人・お師匠	ク、婦人学級・デパート・店の講習	ケ、独学	コ、習ったかどうか忘れた	無答	B. 現在の技能 ア、完全にできる（と思う）	イ、だいたいできる（と思う）	ウ、裁ってあればできる（と思う）	エ、できない（と思う）	無答	C. 過去1年間の自家製作数 ア、0枚	イ、1～2枚	ウ、3枚以上	無答
		%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
洋裁	1. ブラウスまたは仕事着（スモックなど）	9.4	28.1	15.6	2.3	19.6	3.5	6.1	0.5	6.6	1.2	18.7	18.5	28.0	16.4	5.6	31.5	32.9	16.6	9.3	41.3
洋裁	2. スカートまたはスラックス	8.9	17.5	14.0	1.9	20.1	3.5	7.2	0.5	8.4	0.7	22.9	18.9	27.6	15.2	5.1	33.2	28.0	17.1	12.4	42.5
洋裁	3. ワンピースドレス	12.9	8.7	12.2	1.7	19.6	2.6	6.3	0.7	5.1	1.9	31.5	13.6	21.2	15.7	9.1	40.4	33.7	11.4	8.2	46.7
洋裁	4. ジャンパースカートまたはベスト	17.0	3.8	8.0	1.7	18.4	1.6	5.2	0.2	7.9	1.4	38.1	12.4	15.6	15.0	12.1	44.9	36.5	7.9	3.5	52.1
洋裁	5. ワンピースドレスまたはスーツ	22.6	1.2	7.0	2.1	14.2	1.0	3.8	0.2	1.9	1.0	45.3	8.7	8.6	8.4	25.0	49.3	38.8	3.7	3.0	54.5
洋裁	6. レインコートオーバーコート	29.0	0.3	3.5	1.4	11.2	0.7	2.4	0.3	1.7	0.5	49.0	7.3	6.5	6.3	28.0	51.9	39.5	2.1	2.3	56.1
和裁	7. ひとえの長着，じゅばん類	6.8	24.8	13.3	0.7	10.1	8.4	12.9	0.5	1.6	1.7	24.3	16.4	23.8	7.9	8.0	43.9	32.9	10.5	4.4	52.3
和裁	8. 羽織（ひとえ，あわせ）	11.0	15.7	12.6	0.9	10.3	5.8	13.8	0.7	1.7	1.4	29.7	10.5	17.7	8.2	14.2	49.5	37.6	5.6	1.7	72.6
和裁	9. あわせの長着，じゅばん類	11.7	12.9	13.5	0.5	9.3	6.5	13.3	0.7	2.6	1.0	30.9	11.5	20.6	6.8	12.8	48.3	36.2	5.2	2.6	56.0
和裁	10. ふとん類	13.3	3.0	4.9	0.2	5.8	20.3	7.3	1.6	8.0	0.5	33.4	19.6	22.4	4.7	7.7	45.6	24.0	12.9	13.1	50.0
和裁	11. 帯　類	15.9	8.0	9.8	0.5	9.4	7.7	11.7	1.2	2.8	1.4	33.9	11.7	19.2	4.5	14.5	50.0	30.0	5.1	2.4	56.5
和裁	12. 子どもものの長着	12.1	9.6	9.4	0.3	8.2	10.3	9.8	0.7	5.6	1.0	30.9	12.8	20.8	6.6	9.6	50.2	36.9	4.7	1.9	56.5

方を知るめやすとして，衣類の持数についての考えを問うてみた。結果は図2に示すように，「（ふだんよく着るものについては）少しのゆとりを持たせてある程度は衣生活を楽しみたい」と答えた者が約半数を占め最も多かった。「（経済状況にかかわらず）必要最少限にとどめたい」者も3割強あって，これらを合せると大多数の者は合理的な衣生活を指向していることがうかがえた。生活水準の向上と共に生活の関心事も多様化し，むかしほど衣服が女性をひきつける存在ではなくなっているとも考えられよう。

3．被服製作技能の履習状況について

ここでは表11に示したように，洋裁6品目，和裁6品目を例としてあげ，それぞれについての過去の履習状況を問うてみた。結果は表11，Aに示す通りである。無答率がかなり高いので，ここでは個々の数値よりも全般的な傾向としてとらえて行きたい。

被服製作学習はいずれかの機関，方法を通してかなりされているとみられるが，やはり製作技術上高レベルと考えられる品目や日常の必要性の少ない品目では「全く習ったことがない」者も多くなっている。また機関別にみると全体に分散しており，中学校，高校での学習率も基礎的なものを除き全般的に低い。また洋裁，和裁を比べると，洋裁が裁縫学校を含め学校での学習によるものが比較的多いのに対し，和裁は家庭，個人，師匠による学習が比較的多いといえる。

4．現在の技能の程度について

同じくこれらの品目について，現在どの程度の技能を有するかを問うてみた。結果は表11Bに示す通りである。この質問についても無答率がかなり高かったが，全般的には過去の履習状況と対応しており，「できない（と思う）」と答えた品目はやはり製作レベルの高いものや必要性の少ないものである。しかし大多数の者は，必ずしも充分とはいえないにしても，日常の衣服製作についてどうにか間に合うだけの技能は有しているとみてよいだろう。

5．過去1年間の自家製作数について

次に過去1年間に家庭でどのくらいの被服製作が行われたかを，同じくこれらの12品目について問うてみた。結果は表11Cに示す通りである。さきに図1において「ほとんど自分で作る」者がごく少数であることがみられ，また表9の家事労働時間の中で「裁縫，つくろいもの」の時間が極めて少なくなっていることがみられたが，ここでもそれらを裏書きするように，1年間全く作らなかった者は，すべての品目を通じ，1枚以上作った者の比率を上回って3～4割に及んでいる。この数値はかなり多かった無答者の分も考慮すると，実際にはもっと高率になるものと思われる。品目別にみると，ブラウスやスカートなどの平常着の製作数が比較的多いのは当然として，「ふとん類」の調製率も比較的高いのが注目される。これは「ふとん類」は他の衣類と違って毎日使用されるものであり，また使い捨てではなくふつうは何度でも再生して使用することが行われているため，家庭での調製頻度も高いのであろう。またこのような作業がまだ余り社会化されていないためでもあろう。しかし過去の履習状況をみると，「ふとん類」については「家庭」で習ったとした者が約20%で最も多く，学校教育ではほとんどなされていない。それにもかかわらず技能の程度で「できる（と思う）」と答えた者が比較的多いのも，家庭での製作の必要度が高いためと思われる。

Ⅱ．被服製作の実態および意識に影響を及ぼす要因について

以上主婦の被服製作の実態と意識について概観してきたが，次にはこれらの実態や意識に影響を及ぼす要因はいったい何であるのかを，地域別，年齢別，職業の有無別，年収別などの角度からの比較検討により探ってみることにした。それによって家庭における今後の被服製作の動向をより的確に把握し得るのではないかと考えたからである。

1．地域別比較による要因の考察

この場合地域は商業地域，住宅地域を主な構成要素とする中心部と，農村部の二つのグループに分類して比較を行なった。調査対象者家庭の地区別分類とその人数は表2に示す通りである。

(1) 衣類の調製方法とその理由について

まず衣類の調製方法とその理由についてこの両地域を比較してみると図3の通りである。すなわち「ほとんどすべて買う」傾向は中心部より農村部によりいっそう強くみられる。そして自分で作らない理由を図3のcでみると，「忙しくて作る時間がないから」と答えた者の比率も農村部に多くみられた。これは表12の地域別の母親の職業状況にもみられるように，有職者の比率は中心部が約60%に対し農村部は約74%とかなり高いこと――その中には農作業と雇用労働の二重の負担を負っている者も多いと思われる――，また農作業自体もかなり重労働であって被服製作のゆとりが得られないことなどがその

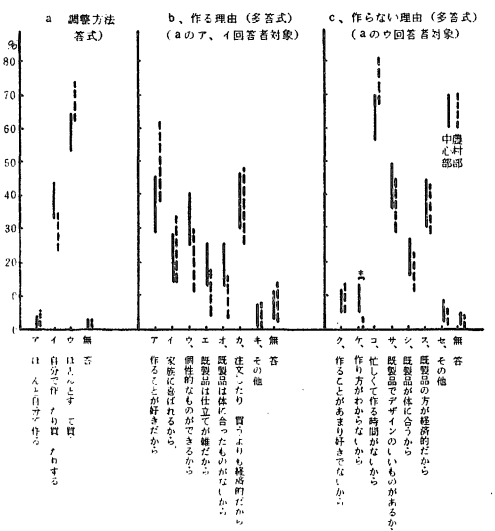

図3　衣類の調製方法とその理由
―中心部，農村部別比較―
注：*印は95%信頼水準で有意差のあるもの

表12　地域別の母親の職業

母親の職業	中心部 人数	中心部 比率		農村部 人数	農村部 比率	
	人	%		人	%	
農，林，漁業	7	2.1	58.9%	67	30.1	73.6%
自営商工，サービス業	85	25.4		29	13.0	
公務，会社，教員，パート	103	30.8		67	30.1	
労務	2	0.6		1	0.4	
内職	21	6.3	32.4%	11	4.9	22.4%
家事専従及び無職	87	26.1		39	17.5	
無答	29	8.7		9	4.0	
計	334	100.0		223	100.0	

理由と考えられる。

また作らない理由で逆に中心部が農村部より比率の高いのは「既製品でデザインのいいものがあるから」「既製品が体に合うから」などであるが，これは中心部の方が既製品の種類や品数も豊富でまた購入の便もよいためと思われる。また「作り方がわからないから」と答えた者の比率も中心部に多い。

ひるがえって図３ｂ，作る理由について両地域を比較してみると，農村部の主婦には「作ることが好きだから」というものが多いのに対し，中心部では「個性的なものができるから」と答えた者も「好きだから」に次いで多くみられた。また「既製品は仕立てが雑だから」「既製品は体に合ったものがないから」などの既製品への不満によるものも農村部より中心部の主婦に多くみられた。これらの結果よりみて，中心部の主婦たちの方がより個性的な衣服や品質のよい衣服への指向が強いとみられる。

(2)　被服製作に関する実態について

まずＡ，過去の履習状況について両地域を比較してみると，「全く習ったことがない」者の比率が，和裁６品目平均において，中心部15.2%に対し農村部は7.5%とやや少ない傾向がみられた。またＢ，現在の技能度についても「できない（と思う）」と答えた者は和裁６品目平均において中心部13.1%に対し農村部は8.7%とやはりやや良好な結果を示した。このことはさきの図３Ｃ，作らない理由において，農村部の主婦に「作り方がわからないから」と答えた者がほとんどいなかったことにも表われている。またＣ，１年間の製作数では，洋裁６品目のいずれについても，農村部での製作数が少ない傾向がみられた。

これらの結果からみて，農村の主婦は和，洋裁ともにかなり履修もし，技能も持っており，また図３ｂ，作る理由の中にもみられたように，作ることも好きな者が多いのにもかかわらず，現在の多忙な生活のなかでは，その能力をじゅう分に生かし切れない状況にあるといえよう。

(3)　衣類数に対する考え方について

衣類数に対する考え方では，「必要最少限にとどめたい」はやや農村部に多く，「少しのゆとりを持たせたい」「なるべく多くしたい」はやや中心部に多い傾向がみられた。やはりサラリーマン，商工業者の多い中心部では農村部より衣類への関心が高まるようである。

2.　年齢別比較による要因の考察

この場合の年齢は，表７に示したように，39才以下，40～43才，44才以上の三グループに分類した。この年齢区分は学校教育との関係を考慮したものである。すなわち44才以上の者は昭和22年以前の旧制度下で初等，中等教育を受けており，40～43才の者は昭和22年に新制中学校が発足してから間もないころの中学校在学者であり，39才以下の者は，中学校における職業・家庭科の性格がほぼ固まり軌道にのり始めた昭和26年以降の中学校在学者である。

(1)　衣類の調製方法とその理由について

まず衣類の調製方法について三グループを比較してみると図４ａの通りである。すなわち若年層ほど自分では作らない傾向が僅かながらみられる。ｂの作る理由では44才以上の高年層が他の若，中年層と多少異なった傾向を示している。すなわち，高年層では「作るのが好きだから」「家族に喜ばれるから」「個性的なものができるから」などの理由が比較的多かった。これはほぼ戦時中に成長期を過ごした高年層では，裁縫は女子の仕事という伝統的な考え方になじみ，そのように教育された影響かもしれない。また「既製品は仕立てが雑だから」と答えた者も高年層に多かったが，これはひとむかし前の画一的で品質もよくなかった既製品のイメージから抜け切れないでいることや，買わなくても自分でもよいものが作れるという自負心の表われではないかと思われる。またｃの作らない理由をみると，若年層では「作ることがあまり好きでないから」「作り方がわからないから」が比較的多く，また「既製品でデザインのいいものがあるから」という理由も比較的多かった。これらは戦後次第に既製品が質，量共に充実し，――特に若向きのものはデザインも豊富である――一方それに反比例するかのように自家製作の必要性が失われ，技能も興味も衰退しつつある現状をそのまま反映しているように思われる。「忙しくて作る時間がないから」という理由はいずれの年齢層でも最も多い理由ではあるが，特に中・高年層に多くみられた。ここで有職率をみると，若年層65.1%，中年層67.7%，高年層62.8%でさほど違いはなく，これが原因とは考えにくい。或いは自分で作る意思も能力もあ

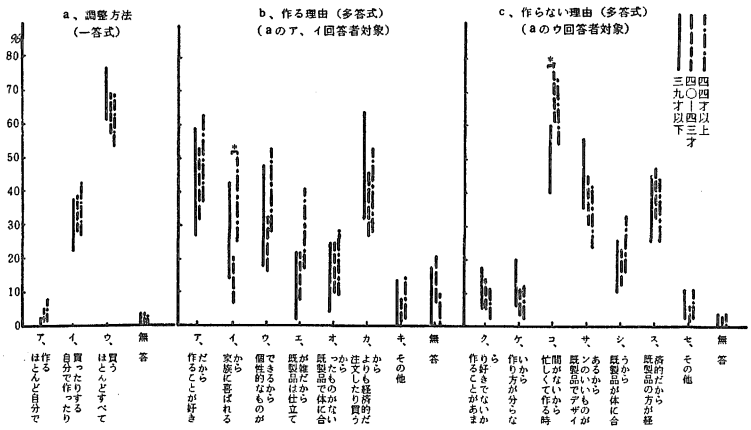

図4　衣類の調製方法とその理由　―年齢別比較―

る中・高年層では，忙しくて作れないという意識が特に強いのかもしれないが，はっきりしたことはわからない。

(2)　衣類数に対する考え方について

衣類数に対する考え方を年齢別にみると，図5 (p.98) のようであった。すなわち高年層が若・中年層に比べて「少しのゆとりを持たせたい」「なるべく多くしたい」共に多い傾向がみられた。これは子育てが過ぎ自己を取戻す時期にある高年層では，衣服への関心が高まっているためと思われる。また経済的安定という要素もじゅう分考えられることである。

3.　有職，無職別比較による要因の考察

主婦の職業の有無が被服製作状況にも影響を及ぼしていることは，これまでの地域別比較のなかでもうかがえたのであるが，ここでは表4の妻の職業により有職者グループ（370人）と無職者グループ（内職者を含む。138人）とに大別して比較を行なった。

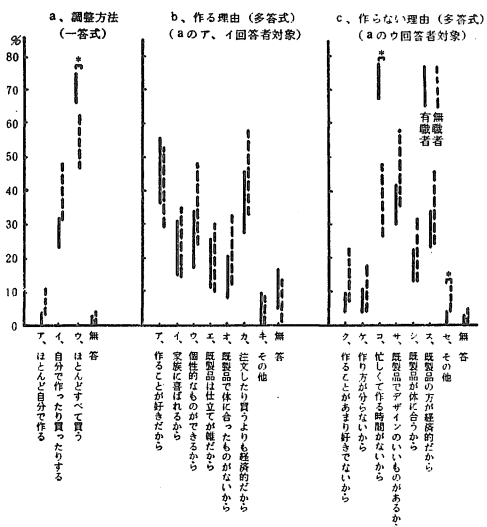

図6　衣類の調製方法とその理由
―有職者，無職者別の比較―

(1)　衣類の調製方法とその理由について

まず衣類の調製方法についてみると，図6 aに示す通りである。すなわち有職者グループは無職者グループに比べ「ほとんどすべて買う」者の比率がかなり高い。またbの作る理由をみると，無職者グループの方が「個性的なものができるから」「既製品で体に合ったものがないから」「注文したり買うよりも経済的だから」において高率を示し，衣類の調達に対し比較的ゆとりをもって対処していることがうかがえる。またcの作らない理由をみると，やはり有職者グループに「忙しくて作る時間がないから」をあげた者が圧倒的に多かった。ここで両グループの被服に関する家事時間を比較してみると，図7の「洗たく，アイロンかけの時間」では両者の差はほとんどみられないのに対し，図8の「裁縫，つくろいものの時間」では両者の差がかなりみられた。これは忙しさのしわ寄せが特に労力，時間を要し，しかも既製品の便のある被服製作に集中していることを表わしている。

(2)　衣類数に対する考え方について

このことについては両グループ間の差はあまりなく，有職者グループに「少しのゆとりを持たせて楽しみたい」と答えた者がやや多い程度であった。これは有職者では人との交際や外出の機会が多くなるためであろう。

4.　収入別比較による要因の考察

収入の多少は被服製作状況や意識にどのような影響を及ぼしているかをみるため，収入階層別比較を試みた。収入階層は表5に示した区分によって4グループに分類した。

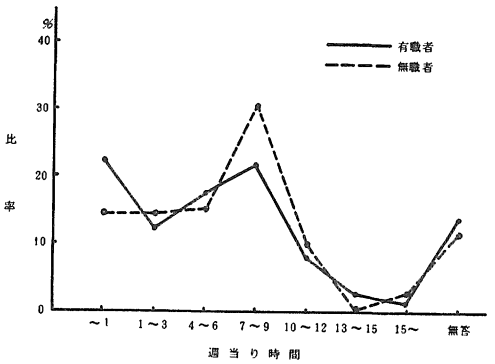

図7　洗たく，アイロンかけの時間（週当り）
—有職者，無職者別比較—

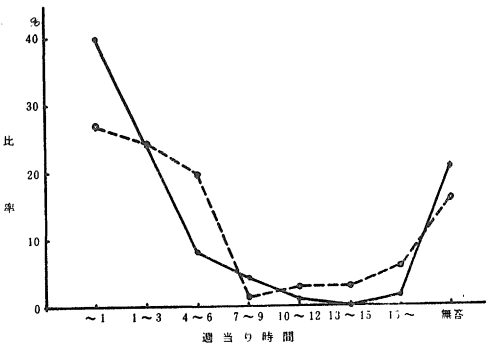

図8　裁縫，つくろいものの時間（週当り）
—有職者，無職者別比較—

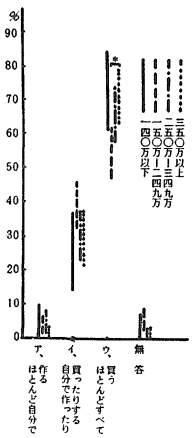

図9　衣類の調製方法
—収入別比較—

(1)　衣類の調製方法について

図9に示したように，「ほとんどすべて買う」と答えた者は最下層と最高層に多く，中間層に少ない傾向がみられたがその理由は明らかでなく，今後の検討にまちたい。各階層毎の有職者率も70～80%とほぼ等しく，これが原因とは考えられなかった。

(2)　衣類数に対する考え方について

総理府統計局の家計調査[5]によれば，収入の高階層ほど被服費が多くなり，生活費に占める割合も高くなっている。この調査でも，図10（p.98）に示す通り，やはり収入の多い階層ほど「少しのゆとりを持たせたい」の比率が高く，「必要最低限にとどめたい」は逆に少なくなっていて，収入と衣生活に対する考え方とは関連があることを示している。最近は生活水準の向上とともに，被服よりも他の生活面への関心が大きくなりつつあるとはいえ，まだ収入の制約はかなり被服生活やその意識に影響を及ぼしていると考えられる。

ま と め

以上，出雲市在住の主婦の被服製作に関する実態と意識を把握し，さらにそれらが地域，年齢，職業の有無，収入などのちがいによってどのような影響を受けているかについて考察してきた。

従来行われた調査でも，家庭における被服製作の割合がかなり減少している事実が報告されているが，[6]この山陰の一小都市である出雲市においてもそれが例外でないことが，この調査によって確認された。そしてその大きな原因は有職主婦の増加と既製品の大量進出にあることが改めて認識された。またもう一つの背景としては，生活水準の向上に伴なって，衣料の「使い捨て」が進み，或いは衣類への関心や欲求がひところほどではなくなっているという状況があることも推察された。また，これらの実態や意識は，対象者の育った時代を反映していることも認められた。すなわち戦前，戦中の伝統的な裁縫教育の名ごりをとどめている高年者に比べると，若年者は既製品を抵抗なく受け入れ，従って製作の技能や興味も衰退しつつあるのではないかと推察された。また有職の主婦，特に農村の主婦では多忙さのために衣生活に対するゆとりのある対応を失ない，既製品への依存度をいっそう強めている状況がうかがわれた。今後有職の主婦がますます増加し，既製品の質的向上や生産，流通のいっそうの増進がはかられるならば，家庭での被服製作はいっそう少なくなると予想される。

しかしまた，このような趨勢の中でも，家庭での被服製作が女性にとっては創造性や個性を発揮するための自己実現の場であり，また家族との交流を深める重要な場でもあるという認識が，根強く貫かれていることを感じさせられた。このような，人間性回復をはかるための一つの場としての意識がある限り，家庭での被服製作の意義が失われ，或いは消滅してしまうことはないと思われる。むしろ現在のような人間疎外の管理体制が進みつつ

ある社会にあっては，その意義はいっそう重要になってくるのではないだろうか。

このような家庭における実態の認識の上に立った，学校教育の中での被服製作指導はいったいどうあるべきだろうか。まずはじめに，緒論にも述べたように，被服製作学習を技能学習にのみ矮小化することなく，生活全般にわたる広い視野の中でとらえて行く姿勢がよりいっそう必要と思われる。しかしまた，手を使ってものを作り出す行為が人間のいとなみの原点であり，個人の人間形成上にも大きな意義があることも忘れてはならない。また，合理的な手法や能率的な機器の大胆な導入によって，技術の近代化をはかり，めまぐるしい現代生活の要望にじゅう分こたえ得る学習をすすめなければ，学校教育が実生活と遊離した陳腐なものに堕する怒れもある。いずれにしても家庭科における被服製作学習はいま大きな転機を迎え，われわれ関係者のいっそうの努力が必要とされているのである。

終りに臨み，本調査に快くご協力下さいました出雲市立第一中学校，同第二中学校の先生方，保護者の方々，生徒の皆様に厚く御礼申しあげます。

参考文献

1）藤田英二：比率の信頼区間について，教育センターだより，S.50.5，島根県立教育センター，1975
2）総理府編：婦人の現状と施策，ぎょうせい，p. 75，1978
3）労働省婦人少年局編：婦人の歩み30年，労働法令協会，p. 158－160，1975
4）伊藤秋子：生活水準，光生館，p. 168，1977
5）総理府統計局：家計調査年報昭和52年版，p. 119，p. 125，1978
6）清水房，石渡すみ江，大山サカエ：家庭科教育内容に関する研究（第11報），家政学雑誌，26巻6号，p. 62－68，1975